

2021年12月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教89「たとえ愛を見失っても」

詩編89：47～53、マルコ15：16～20

詩編第89編は「王の詩編」と呼ばれます。長い詩編ですが、全体として悲哀に満ちています。それはイスラエルの衰退、滅亡がこの詩の背景にあるからです。どうして国が滅ぶのか。それは「わたし（神さま）の教えを捨て、わたしの裁きによって歩まず、わたしの掟を破り、わたしの掟を守らない」（31～32節）ところに原因があります。実際にダビデの子ソロモンは異教の神々に傾倒し神さまの教えを捨てました。その後、王国は分裂し衰退していきます。そしてアッシリア、バビロニアによってイスラエルの国は完全に滅びました。

そのことを承知の上で、なおこの詩人は神さまにもう一度昔の契約を思い出してほしいと訴えます。「主よ、真実をもってダビデに誓われたあなたの始めからの慈しみはどこに行ってしまったのでしょうか」（50節）ここに「慈しみ」（ヘセド）が出て来ます。旧約聖書で言う「慈しみ」は神さまの不変の契約のことです。詩人は、神さまがその慈しみゆえにイスラエルを見捨てられることはないと信じています。そしてそこにはやがて国を建て直す新しい王、メシアが到来するというメシア待望が芽生えました。例えば、クリスマスによく読まれるイザヤ書9：5～6、11：1等にある「ダビデの王座」「エッサイの株」という表現は、ダビデの子孫から新しい王が起こされるというメシア待望の中心的思想です。そういう真の王をイスラエルは待ち続けます。しかし捕囚後もダビデの子孫から国を復興する王は現れませんでした。ペルシャやシリア、やがてローマの属州となり、ダビデ王国建設の夢は儂く消えていきます。

その悲しみ、儂さがこの詩編にも謳われています。「心に留めてください。わたしがどれだけ続くものであるかを。あなたが人の子らをすべていかにむなしいものとして創造されたかを」（48節）人間の支配の限界。それがいかに虚しいものであるか、儂いものであるかがこの言葉に表されています。先週は12月8日の真珠湾攻撃から80年という節目の年で、戦争に関する番組や新聞の記事を多く目にしました。改めて国というのはその王、指導者によって立ちもし倒れもすることがよくわかります。当時の日本は軍を中心とする指導者らによって太平洋戦争に突き進んでいきました。その場の情勢や一部の人間のプライドだけで無謀な戦争を始めた。資源のない日本が燃料確保のため、大東亜共栄圏という美名のもとに、アジアの国々に侵略しました。そこで行われたことはあらゆる暴力、殺戮、搾取です。その結果、何が残ったのでしょうか。日本は戦争に負け、多大な犠牲だけが残りました。これは当時の国の指導者たちの愚かさ以外の何ものでもありません。あの戦争は一体何だったのでしょうか。何のために多くの若者たちが戦場に駆り出されて行ったのでしょうか。

それはイスラエルも同じで、その歴史の中で人間の支配の限界を知りました。ダビデ王国とは何だったのか。ダビデ、ソロモンまではかろうじてよかった時代もあったでしょう。でもせいぜい1、2代なのです。結局は、神さまに対する背信、偶像礼拝が横行し、人々の間には貧富の差が生じ、あらゆる不正が横行します。それはその時代の多くの預言者が証言している通りです。そこに人間の支配の限界があります。それゆえ詩人は神さまの慈しみに望みを託しました。もし国が回復するのであれば、それはもはや人間の支配ではない。神さまの慈しみ、不変の契約にこそ根拠がある。神さまの慈しみだけが頼りなのです。その慈しみはどこに表されたのでしょうか。

この慈しみはイエス・キリストにおいて表されました。イザヤの預言「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた」(9:5) この預言もまた福音の光を照らして見るときに、それはダビデのような人間の王の再来ではなく、イエス・キリストの到来を意味するものとなります。そのようにして人間の支配ではなく、神さまのご支配のもとになお慈しみは継続されることをわたしたちはキリストを通して知るのです。クリスマスの物語で天使ガブリエルがマリアに告げました。「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」(ルカ1:32~33)と。

そのキリストのご支配はダビデのような支配でしたでしょうか。そうではありません。「彼らはあなたの油注がれた者を追って辱めるのです」(52節) ここにはメシア(油注がれた者)が辱めを受けるメシアであることが記されています。そのようにして人類の罪の歴史を担われ、これをご自身の命をもって贖われるメシアなのです。今日は新約聖書マルコ福音書のキリストの受難のところを読みました。ローマの兵隊は「ユダヤ人の王、万歳」と言ってキリストを侮辱しました。新しい王であるキリストはこの詩編の御言葉の通り辱めを受けられたのです。さらに興味深いことには、主イエスの十字架の罪状書きには「ユダヤ人の王」と書いてあったと記されています。それは、この世の王の支配がキリストの十字架において滅ぼされたことを意味しています。この世の王の支配はキリストの十字架によって終焉を迎えました。キリストは十字架で罪を贖い、三日目によみがえられて新しい王の支配を始めてくださいました。それは力による支配ではありません。愛と恵みによる支配です。わたしたちのためにご自身の命をささげてくださいましたお方だからこそ、わたしたちは喜んで主に仕えるのです。そのような愛と恵みによるご支配、新しい神の国という王国を始めてくださいました。キリストがその転換点におられます。

イスラエルにとって国が減ぶ、失われることは、神さまの慈しみ、その愛を見失う事態でした。「あなたの始めからの慈しみはどこに行ってしまったのか」(50節)でもその慈しみは決して途絶えてはおりません。契約は破棄されていないのです。キリストの誕生、クリスマスの出来事によって新しい王の支配、神の国がもたらされました。来週はクリスマス礼拝です。この年、神さまの愛を見失いそうになる試練の年だったかもしれません。それでもわたしたちはクリスマスを迎えることができます。それはそのような試練の中でも神さまの慈しみを見出すことができるためです。そのために御子は真の王としてお生まれになりました。新しい恵みのご支配、神の国を始めてくださいました。このクリスマスを共に喜び祝いしたいと思います。